

龍南

著者	森田，林，四杉，喬次郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 1
ページ	1 0 6 - 1 0 6
発行年	1916-06-15
その他の言語のタイトル	竜南
URL	http://hdl.handle.net/2298/6637

龍 南

龍南を去るに臨みて

舊學務委員

森 田 喬次郎

任を受けて茲に壹年復新緑に會ふ、俯仰の覆載悉く剛放の氣に澄み四邊の綠翠益清爽の色に誇れども我等の心裡感々焉として迷悶絶ゆる事なく悔恨の悲情暢然として懊惱久しく禁する能はず、噫過去を憶へば蒼茫として夢の如し。

菲才凡庸華を競へば過多し、懷疑世上千古の鐵案を下すは到底吾人の能にあらず、溷濁渦中無窮の警鐘を撞くは當に才人の事に屬す、謫劣何ぞ大名を干めむ、標するを避け榜するをやめ常に實現に志し驕慢を愼み懈怠を戒め敢て必ずしも功を邀へず、事至らば則ち赤誠以て之に當り唯我所信を行は、或は先人の功を守り誤なきを得むかと、之吾人一歳の箴規にして深く自ら誠むる所なりき、然れども閑々たる小知、孱々たる微力、理想は永へに理想にして事志と違ひ徒らに先人の教に悖り同僚の意に背き、一歳の

努力多く蹉跎の連續に終り、空しく罪を龍南に求めて怒を一千の諸君に買へり、赫耀たる歴史に對し吾人忸怩として夙夜嘆息するも後悔遂に剛も及ばず、諸君の寛恕の德に思ひ併せて慚汗背に流るゝ事荏なり。然れども百事意の如くなり難きは正に世の常なり。幸に衷情常に善果を夢み主張力説の一貫せるあるを認めて纔かに自ら安んぜむとす。

あゝ今や韶光逝きて生氣更に旺厲、柳糸燎乱して穰穰の氣到る處に横溢するの時龍南豈獨り愒々の嘆あらむや剛毅朴訥の主義皎々昭々として一千の心裡に天網の如く相映じ寶琴の如く共鳴す、映せられしものは映するに至り彈せられしものは彈するに至る新鋭の士此主義を體得して意氣漸く隆盛望む所多し。古人曰く天地正大の氣粹然として神州に鍾ると神州靈和の氣又粹然として龍南に鍾る。加ふるに時代の思潮は敏感なる吾人青年を驅りて大なる試練の下に置けり。我炳乎たる校風を誇る者よ徒らに自他舊來の陋習に憧憬する事をやめ益自重を加へ猛省一番皮想の見を碎斷して虚心怛懷、眞摯率直、理想の神髓に透徹せよ。諸君の祝福を禱つて龍南を辭するの詞とす。